



うたの☆プリンスさまっ♪  
All Star : AFTER 寿嶺二編



himorogi

あれから忙しい日々が続き、やはり会う時間は限られてばかりだった。激しい雨が降っていても、その日しか会えないというのなら、焦れる気持ちを抑えながらハンドルを握って彼女のいる方を目指した。

「お疲れちゃん！ こんな天気の良い日でごめんね、やっと空いたオフなんだ！」

僕は大きな声で言い訳をしながら車のドアを開いて彼女を招き寄せる。傘で隠れている彼女の表情はわからなかったけれど、傘を畳んで乗り込んできた彼女の横顔を見たら、途端に急いていた気持ちが、海のように波引くように、静まっていったのがわかった。

「おつかれ様です！ お仕事帰りなのに迎えにきていただいてしまって申し訳ないです。」

彼女はいつものように他人行儀で、申し訳なさそうに言う。僕は久しぶりに見る彼女をまじまじと見つめながら、それでも何だか言い得ぬ違和感を感じていた。

「ごめんね～ 今日はどうしようか？ 雨だからドライブしてもしようがないし～ どこか行きたいところあるかな？」

あまりにも急ぎすぎたせいか今日のプランをまったく考えていなかった。とはいえもうこんな時間で夜で、どこに行きたいか？なんて聞かれても彼女は絶対に困るはずだ。自分が聞かれたら困る、そう思うからこそ尋ねるべき質問ではなかったなと口にしてからいつも僕は後悔する。

「嶺二さんの行きたい場所で大丈夫ですよ」

「そうきたか～ 僕の行きたい場所ねえ～・・・ そうねえ～」

目的が見つからぬまま車は走り続ける。

「あっ。そのブレスレット」

「ん？ ああ、これ？ かわいいでしょ！」

「イルカがついてますね。・・・嶺二さんが選んで買われたんですか？」

「うーん、今日の朝ファンのことが持ってきてくれたんだよねえ。ついかわいいからつけちゃったけどさ。ハルちゃんが欲しいならあげるよ」

「えっ・・・いいえ、あの、そんなつもりで言った訳ではなくて・・・」

気になっていた違和感が彼女の表情として一気に現れる。自分としても何の気なしに言ったつもりだった。なんとなく気まずい雰囲気の中、僕は目的地をようやく決めた。

「ハルちゃん、明日お休み？」

「え、え、いいえ、その・・・」

「僕は明日オフにするよ」

「はっ・・・えっ、お仕事は・・・」

「決めただ。僕の行きたいところ」

彼女の返事は待たずに目的地へ向かう。向かっているはずで、距離も遠くないのに、どうしてこんなに遠く感じるのだろう。はしってもはしっても届かない、不思議な気持ち。僕は感じて

いた。彼女の心のどこかに影があることを。

不思議な感覚に包まれながらも、車はちゃんと目的地へ着いた。助手席に座る彼女をエスコートしながら、僕はその建物に入る。

「・・・嶺二さん、もしかして今日は・・・御泊まり、でしょうか？」

「ピンポン、正解。よくわかったね～ 正解した方にはもっとサービスしなきゃね」

僕たちはもう付き合ってから2年は経っていた。その間、もちろん恋人らしいことはたくさんしたし、これからしようとも思っている。彼女は2年経っても照れ屋で慣れないけれど、そこがとっても僕は可愛く思えて大好きだった。いつまでも彼女と一緒に恋に落ちていられる。そんな気持ちだった。

彼女はいつものようについてきた。小動物のように、ちょこちょこと隠れるように僕の服の袖を引っ張り、誰かに見られるのをいやがるように。恥ずかしいんだろうな、と僕はくすりと笑った。このとき僕は彼女の気持ちにこれっぽちも気づいていなかった。気づいていればあんなに彼女を泣かせることなかったのかもしれない。

いつものように最上階に部屋を借りて、僕はまずベッドに座った。彼女が居心地悪そうに、居場所を見つけられずにうろちょろするのはいつものことで、僕は自分の隣をぽんぽんと叩いて手招きする。

「おいで」

「・・・」

「どうしたの？　・・・ん？　おいで」

聞こえなかったはずはないし、彼女の瞳はまっすぐ僕を見つめていた。それに応えるように僕は彼女を見つめていたし、彼女の眸から除く幾千にも見える睫毛が震えているのがわかった。

「嶺二さん、ごめんなさい・・・」

「え？　・・・えーと、何を謝るの？　ハルちゃん、何もしてないじゃない。やだなあ　謝ることなんて」

「違うんです」

彼女が勢いよく僕の言葉を遮った。

いつもの彼女は一人饒舌に喋る僕の言葉にただひたすらに耳を傾けていてくれた。僕の話にひとつひとつ頷いて、相づちを打ったり、いろんな意見を交わしたり。わかるのは、今回はそういったことはなかった。ただ僕の言葉は彼女の「違うんです」というたった一言にかき消された。

「ごめんなさい・・・　あの、今日は・・・帰ってもいいでしょうか」

「・・・うん。　ごめんね。体調悪かったかな・・・　帰り送るからちょっと待ってて」

僕が立ち上がった瞬間、彼女は慌てて言う。

「大丈夫です、ここからなら帰り道わかりますし、近いですから」

「でも大雨だよ。こんな雨の中、帰すことなんてできない」

今までにない彼女の態度に理解が追いつかないから、僕は少し苛立つような声を出してしまった。彼女は何回も何回も、ごめんなさいと謝っているのに、その謝罪すら鬱陶しく感じる。

「最初から、言えばよかったですよね・・・ ごめんなさい」

「ん。 いいよ。 久しぶりに顔を見ただけでも元気になれたからさ。」

せめてもの抵抗に彼女の頭を撫でる。なんだかさっと避けられそうな気もしたけれど、彼女は大人しく僕の掌の中でじっとしていた。

元気になれた、なんて嘯きながら僕は彼女が早く帰りたいそうにしているのを察して、「じゃあ、またね。あとで連絡するよ！ 次は・・・ あ、ハルちゃんの予定に合わせるからさ」

「はい。本当にごめんなさい・・・」

謝るばかりで見えてこない理由。彼女は部屋から去っていく。こんな広い部屋に取り残された僕は、天井を見上げながら、思い当たる節すら見つからないこの状況に、ただため息をつくしかなかった。

気にすることなんてない、と自分を励まし続けていた。私さえ信じていれば大丈夫、私がしっかり彼を想う気持ちがあれば。今は前とは違う、一方通行じゃない。愛を手向ければ手向けるほどに、彼は私にしっかりと返してくれる。返してくれる、返してくれるはず……。

久しぶりに会う彼は変わらなかったし、顔を見た途端に安心感よりもばくばくと心臓が音を立てはじめた。いつもテレビを通してみている彼が、今私の目の前にいて、微笑んでいて、私の名前を呼んでいる。

それでもあの言葉が耳を離れない。

—あいつはアイドルなんだぞ。

当たり前なことすぎることに、アイドルだからこそ出会えたんだと思っている。私は思う。彼がアイドルじゃなくたって、出会ってれば必ず彼を好きになっていたんだと。彼がアイドルであったことは二人の出会いのきっかけだけで、それ自体は理由にならない。理由にならないと言いつけさせる、自分に。逆説的になるということを考えてしまうからこそ、そう自分に思い込ませる。

それでもあの胸を刺すような言葉は続く。

—お前以外のファンにも同じようなことをしているんだよ。それが商売だからな。

こんな風に恋人同士のような付き合いをしているけれど、それは誰とでもしているということ？ なぜ……？ それは彼がアイドルだからだよ、と言葉の主の声色そのままに脳内に再生される。

言葉の主は続ける。

—お前は一生、そのままだ。そして飽きたら捨てられる。なぜって？ アイドルだからだよ。掃いて捨てるほどの女がいるのさ。そもそも好きだと言ってくる女はあれほどいるのに、なんでその中からお前を選ぶんだ？

—傲慢がすぎるよ。ハル。考え直せ。今ならまだ最小限の痛みで済む。悪いことは言わない、夢から醒めるんだ。夢を見続けていたら、もう抜け出せない。気づいたときにはボロボロで、君は本当の愛が何かわからなくなってる。そんな君は見たくない。見たくないんだよ。

恋人のように言葉の主は続ける。言葉巧みに中傷しながら励まして、中傷しながら励ましてを

繰り返す。救いと絶望を繰り返し与えるような悲しいやりとりに、私は両手で顔を覆う。大雨に降られながら傘をさしていた帰り道、その傘はいつの間にか足元に転がっていた。

虚無感に襲われながらも、やはり心配になった僕は彼女の後を追っていた。彼女の歩くスピードが誰よりも遅いことなんてわかっていて、一緒に手を繋いで歩くと、とんでもない遅さでいつも驚く。のんびりマイペースな彼女の性格そのままだ。

そんなマイペースな彼女だからこそ追いつけた。僕は彼女に疎ましく思われてもいいと思っていた。理由を聞くこともあきらめて、彼女が真剣に何かを悩んでいたらどうするんだ。口では大丈夫といいながら心は押しつぶされそうになることを誰よりも知っているのは僕自身のはずなのに。

声をかけようと口を開いた瞬間、彼女の傘が転がった。

大雨はあっという間に彼女を覆い尽くし、彼女の髪を肩を、そして身体を、着ている洋服が濃く濡れてシミづいていくのがわかった。突然のことにあっけをとられていたが、すぐに自分を取り戻して声をかけようとした瞬間に、もう彼女は傘を持っていた。

いや。持っているのではなかった。なぜなら彼女の身長に大してその傘はあまりにも高いところでさされていたからだ。

雨やこの暗さで確認はできないが、知り合いではないはずだ。こんな大男の知り合いはいない。

彼女に傘を差し出したまま、大男は立ち尽くしていた。しばらくすると、彼女が肩を震わせながら大男の胸にしがみついた。

あいつは誰なんだ、と考える間なく、彼女がしがみついた先が自分ではなく知らない男という事実到现在まで感じたことがないショックを受ける。

僕は自信を持っていた。彼女が僕を好きになってくれる、愛してくれる。気づいたらあり得ないほど好きになっていた。そして彼女はこの気持ちを無条件に受け入れてくれることを当たり前のように感じていた。

「ねえ、そろそろ起きなよ。僕もう仕事いくから」

聞き覚えのある声に揺られて、目をこすった。世界からすべての器官を閉ざしてしまいたい。そんな一瞬の想いに駆られてから一切の記憶がない。なぜこの声が聞こえるのかも。

「僕は何も聞かないけど。ちゃんと話し合ったほうがいいと思うよ」

人差し指でくるくるとキーホルダーを回しながら玄関へと彼は向かう。栗色にたなびく髪。朝の光に反射して輝いているように見える。そうか。ここは。

「コーヒー、淹れてあるから。じゃあ僕本当に行くね。戸締まりはオートロックだからなんもしなくていいよ」

彼はそうやって本当に出て行ってしまった。

ああ、なんでこんなことになってるんだろう。なんでよりによって彼のところへいるんだろう。

「バカか、俺は」

淹れてくれたというコーヒーのいい香りが鼻孔をくすぐる。彼がコーヒーを飲むところなんて見たことがない。コーヒーカップを戸棚から見つけて注いだ。そっと唇をつけてそそる。そういえば彼女もよくコーヒーを淹れてくれたっけ。いつも彼女を思い出すときは笑顔だったのに今思い出すのはあのときの泣き顔だ。・・・泣いてたんだと思う。大粒の雨で掻き消されていたとしても、彼女は泣いていたのだと、思う。

ズボンのポケットに入れていた携帯を何の気なしに見てみる。彼女からの連絡はない。何か一言あってもいいのにな、なんてずるい気持ち。携帯をちょっといじっただけで電源が切れてしまった。最近電池持ちが悪いのだ。

明日オフにするよ、なんてかっこいいことをいったつもりが、たった一人でオフを過ごすことになってしまった。携帯の充電が切れたのは都合が良い。これで余計な連絡もこないだろう。

このまま別れが訪れるのかもしれない、連絡をとらず3日ほど過ぎたある日僕はそう思うようになっていた。何度か電話をかけたけれど、まったく応答はなかったし、音信不通になって別れるというのは過去にもよくあった。過去にはよくあったけれど、それでも彼女とはそんな風に別れたくなかったなと思う。いや誰に対してもそうだ。みんな、連絡を絶っていなくなる。僕は、大事な人が救いを求めているときに気づけない。そんな愚かな人間だからこうして繰り返す。周りの人間はそんな僕に飽きれて逃げ出していく。

「ね、聞いている？」

「あ……、あああ、ああ、うんうん！ 聞いている聞いているよーん！」

「それで？ 嶺二はどう思ってるの？ みんな、嶺二の意見待ちなんだけど」

職場のミーティングルームで一緒のチームの皆が集まっていた。僕はそんな中でついつい意識を飛ばしていたようだ。

「んー、皆がいったるやつでいいんじゃない？ 特段僕からこうしたほうがいいよって思うことはないよ」

「え？ それ本心で言ってる？」

「えー、何何！？ 本心だよっ、何疑ってるの？」

「だっていつもならあーだこーだうるさいじゃない。素直だからびっくりしただけ」

「いつも反抗期迎えてる子供みたいな言い方やめてよお 僕だって大人しい日だってあるよ！」

ふん、と周りにいた2人は鼻を鳴らす。

「ではこれでいいのではないか。いつもより時間がかからなくて俺は助かる」

「そうだな、いつものようにこじれて無駄な時間使うよりマシだぜ」

「皆ひどいなあ！」

あっはっは、と笑う僕の顔を、彼だけは訝しげに見ていた。蘭丸とカミュがミーティングルームを後にしてから、2人だけになる。

「ねえ、嶺二。」

「ん、なあにアイアイ。」

「喧嘩でもしたの」

「え—— 誰と？」

「やめなよ、そういうのさ」

藍は目を伏せがちにいう。もちろん僕は恋人がいるとかそういうことは一切誰にも言ってない。アイドルだから当たり前のことだ。彼女にはアイドルである前に男の子、と伝えたけれど、仕事の手前、そんなことを公言するわけにもいかない。

「付き合ってるんでしょ、あの子と」

「……アイアイにバレてるんだったら、ほかの皆にもバレてるのかな？」

「なにそれどういう意味。嶺二はわかりやすすぎるんだよ」

はあ、ため息をついてから藍は座っていた椅子の背もたれに一気に寄りかかる。椅子の軋む音

が部屋の中に広がった。

「アイドルが恋愛するなんて信じられない。って僕はついこないだまで思ってたけど」

「ん？」

「あの子見てたら・・・いいな、うらやましいなって思うようになったよ」

「ハルちゃんはアイアイにはあげないよ？」

「バカ嶺二。そういう意味じゃない」

「冗談、冗談」

若干本気で釘を刺していた。彼女はアイドルと関わる仕事をたくさんしているし、僕がこれだけ惚れるくらいだ、あの優しさは・・・あの優しさは・・・僕がアイドルだから・・・？

「嶺二、顔怖いんだけど」

「ごめん」

「僕は人の恋人を奪るくらい飢えてない。ま、相手があの子なら考えるけど」

そういった藍の眼はさっきより本気のような気がした。

いつも冗談まじりに本当の気持ちをごまかして伝えるのは僕の得意技だ。だからこそ、相手はどこまで本気なのかわかる時もある。藍の言葉にはそんな本気さが感じられた。

「ちょっと待って。そんなことさせないし、そんなことする気なら本気で怒るからね」

「本気にならないですよ。ま、それだけ彼女が魅力的ってことだよ」

「アイアイが？ そんな風に彼女のことは見てるなんて意外だね。あれだけ彼女に対して辛辣だったのにいったい全体どうしたの？ 僕たちがそんなにうらやましくみえた？」

我ながら嫌みな言い方ということはわかっていた。案の定、藍は少し声を張らしながら言う。「そっちは知らないかもしれないけれど、僕だって彼女と何回か一緒に仕事してるんだ。嶺二のパートナーってことはわかるけど、彼女も事務所所属なんだから一緒に仕事することだってある」

「ふうん」と僕はひと呼吸おいて「それで、惚れちゃった？」

「嶺二がいなきゃね。」

不適に笑いながら藍は言う。君がいてくれてよかったよ、とも。「だって僕らはアイドルだよ？ ……人を好きになるのは別に止めはしないけど、僕たちはファンの人たちの恋人でもあるんだ」

「ファンの皆の共有財産ってこと？ 自分の気持ちを押し殺すのなんて僕はごめんだね」

「うん。人を好きになってわかるよ。そんなこといってられないな、って。僕もそう思う」

「アイアイ。もう1回言うけど、彼女に手出しは無用だよ。普段そんなこと言わない君なんだから、僕は驚いてるし、怖がってる」

「怖がってる？ 嶺二が？」

「…アイアイと恋愛話をするなんてね。一生ないかと思ってたのに」

「はぐらかさないで。何が怖い？ 意味わからないんだけど」

「だから、さ。アイアイに彼女をとられるのが…ってこと」

はあ？と藍が不機嫌そうに言う。僕にとってそれは不思議な反応で、僕としては彼を認めているわけなんだから、そんな疑問に思うことなのかなと肩をすくめた。

「何それ。自信ないってこと？ 彼女が嶺二のことが好きってことを信じてあげられないってこと？」

「そういう訳じゃないんだけどさ」

さっき掠めた想い。彼女は僕がアイドルだから好きなんじゃないか、という疑問。こんな恥ずかしいこと言えるわけない。

「それって嶺二が彼女のことを好きだっていう自信もないってことだよね」

ぎく、と胸に何かが刺さる。ちくりとも。それはきっと凶星を突かれたんだってこと、僕は気づいていた。

「何、なんなの？ 嶺二は彼女のことが好きじゃないの？ それでいいじゃない。もしそうじゃないなら」

「・・・なら？」

「彼女が不幸になるだけだ。嶺二が彼女のことを大切にできないなら僕が」

「言わないで、アイアイ。僕は君とも友達でいたいんだよ」

「僕の気持ちは？ 僕はこのまま、この気持ちを押し殺したままでいろっていうの？」

「ごめん。彼女を悲しませることなんてしないから。くだらないこと考えてたんだよ」

くだらないこと？ すぐに疑問符で聞き返してくれる藍の態度に隠し事なんてできそうにないから僕は洗いざらい白状した。彼女の不思議な態度、連絡がつかないこと、僕が「アイドル」であるからこそ彼女は僕のことを好きになったんじゃないかということ。

「アイドル、だからね。まあ、それも理由の1つじゃないの。それがすべてって極端に考えるからいけないんだよ。嶺二らしくないよ、冷静になりなよ」

「理由の1つ、か」

「だってあの子、アイドルに憧れてこの世界に入ってきたっていうじゃない。その憧れと今付き合ってるわけでしょ。好きな理由の1つでも全然おかしくないと思うんだけど」

「たはは、そうだよ。でもなんで、アイドルだから僕のことを好きって思うんだろう。まるで、僕自身が愛されていないと思えるくらい、むなしい気持ちになるんだよね」

「僕は彼女が、アイドルだったら誰でもいいって付き合うような子には見えないけど。嶺二にそう見えているなら、彼女が可哀想だ。そういうの、自分ではバレてないって思っているけども伝わることあるよ」

「・・・そうか、僕は・・・そんな風に彼女のこと、考えてたのかな」

しばらくしてミーティング室のドアがロックされる。

「なんだおめーら。まだ使ってたのか。スケジュールの時間押してるぞ。・・・嶺二。お前にはちょっと話があるから残れ」

「え？ 話？」

「それじゃあ、嶺二。僕のこと言ったこと忘れないでよ」

「あ、ああ。じゃあ、またねアイアイ」

「ん」

藍はすっと龍也の横をすり抜けて出て行く。龍也はその後ろ姿を目で追った後、すぐに僕に視線を戻した。

「嶺二・・・お前、ここんどこ気抜き過ぎだぞ」

「わかってるよー。自分が一番よくわかってる」

「それにしてもだ。アイドルに色恋沙汰は御法度だぞ、わかってるんだろ」

「あちゃ。アイアイにバレてる時点で気づいてたけど、皆わかってたのね」

「いや、俺はこれを見るまで気づかなかったけどな。たいしたもんだよお前も」

会議室の長机の上に、いつものタブロイド紙が無造作に放り投げられた。

放り投げられた紙面を手にとって、文字を目で追う。

——熱愛発覚！人気アイドル、2人で愛のドライブ！？そして2人はそのまま彼の自宅マンションへ

モノクロの写真に映るのは確かに僕の愛車。これで映るのは3回目。スキャンダルもアイドルの勲章だけど僕の場合は受賞しすぎかもしれないな。

「ったく。事務所にもものすごい抗議きてるぞ」

「へえ、ファンの子たちから？ 悪いことしちゃったなあ」

「ちげーよ、相手の事務所からだよ！」

「相手の事務所？」

「だから、ここに載ってる女優の事務所だよ！ 今映画で共演してる相手役の子の事務所、業界でも最大手でスキャンダルが大っ嫌いなの知ってるだろうが」

あーもうめんどくせえ、と龍也は頭を雑然とかきむしる。僕は慌ててもう一度よく紙面を見た。

「ハルちゃんじゃない・・・」

「あ？」

「いや、なんでもない。ああ、そうかこれ・・・あの時の・・・」

「嶺二、頼むからお前もうちょっとおとなしくしてくれよ。こう毎回騒ぎ起こされたら俺も気が気でなくなる」

「ごめんごめん。最近ぼーっとしちゃってたからさっ。次から気をつけるよ」

「頼むよ。んで。どうなんだ？」

「どうなんだって？ 何の話？」

「だから、この女優と。お前は・・・本気なのか？」

「ハハッ。 龍也は心配しなくていいから。皆に迷惑はかけないから」

「もう十分迷惑かけてるんだっつーの！ いいか、これ以上ややこしいことすんなよ！」

あーもうっ、と加えて龍也は会議室を後にした。僕は紙面を見ながら、実はほっとしていた。よかった、彼女じゃなくて。騒がられることの辛さは1度経験してる。彼女が矢面に晒されて何かあったらたまったもんじゃない。むしろこれはいい隠れ蓑だ。こっちの子には悪いけど、世間の目がこっちに引いてくれれば、彼女のことは表沙汰にならない。僕はもともとこの子とは付き合っていないわけだし。うん。大丈夫だ。

「大丈夫じゃない、よ・・・彼女に会えないんだから」

天井を見上げて、僕は顔全体に広げた紙面を頭にかぶせながら、そう呟いた。

一冊の紙面を渡される。私はもう何が書かれているか分かっていた。だってこれが初めてじゃない。もう何回も騒がれていたことだから。私は特に彼に対して問い詰めるようなことはしなかった。いつだって彼の方から、「迷惑かけてごめんね。もちろん書かれていることは全部嘘だから。僕ってば何をしても女の子といれば記事になっちゃうんだよね。本当ごめん。気をつけるよ」といったような言い分で。

結局、気をつけると言われて今回が3回目なのだから実際気をつけてるかどうかについての信頼については揺らぎ始めている。ただここに書かれていることについては事実じゃないんだろうなと思う。そこを信じることができなくなったらいよいよ私たちはダメになってしまう。そんな気がしていたから。

「とっくに自分でダメにしてるのに・・・」

「なんだ、読み終わったのか？」

私より何倍も背があって、すらっとしていて。肩幅があるからガタイの良い大男に見えてしまい初対面の人を全員震え上がらせている彼こそがこの紙面を渡してきた張本人だ。

そして私をひたすら寿嶺二と別れさせようと説得を続けている。その説得方法は理路整然としていて、嫌味な言い方ではあるけれど、やはり私のことを想ってのことだ。

「もう連絡をとってないんだってな」

「距離を置いてるだけです」

「うん、結構。恋人同士が距離を置くのはもう別れる証拠だ」

「私は・・・！ あなたに言われたことをゆっくり考えてそれで・・・」

「アイドルはやめておけ。俺はお前のためを言ってるんだから」

「なんで・・・じゃあ嶺二さんがアイドルじゃなかったらあなたはOKっていうの？」

「そうだな。アイドルじゃなかったら別に言わなかったかもしれない」

私のマンションに居候を続けてもう1週間。海外から戻ったばかりでホテル暮らしも飽きたと押しかけられてそのままだ。

「彼氏から言い訳はこないのか？」

「きっと忙しいんだと思います。事務所からまた謹慎させられてるのかも」

「はは。本気なら今すぐきて申開きでもなんでもすればいいのにな」

「彼には彼の事情があります。何をもって本気かを計るなんて馬鹿らしいです」

「いうね、お前も。じゃあ俺は仕事にでてくるよ」

「どうぞ、いってらっしゃいませ。夕飯はうちで食べるんですか？」

「いや今日はいかない」

玄関で靴を履き替えて、じゃあ言ってくるとだけ言い残して出て行った。もう1週間。できれば早く出て行ってほしいと考えていたら携帯電話のバイブレーションが部屋に響き渡った。携帯はリズムよく鳴り続ける。どうやらメールではなくて電話の着信だ。突然の音にびっくりして私は誰かも確かめずに電話にでた。

「はひっ！」

「あ、出た」

「えっ、えっ、あ・・・この声は、美風先輩！」

「うん、久しぶり。」

「あ、こちらこそお久しぶりです。今日はどうされたんでしょうか？」

「・・・ううん、別に。その、雑誌を見たからね」

「あ、はあ・・・ えっと、寿先輩の・・・」

「そう、嶺二の。まったく馬鹿だよ。もう3回めでしょ？ 君もご苦労様だね」

「いえ、いえいえ、美風先輩にお気遣いいただくほどのことでは」

「嶺二をパートナーに選ぶって聞いたときに止めときゃよかったよ」

「え？」

「仕事以外のパートナーにもなってるみたいだしね」

「み、み、美風先輩はご存知なのでしょうか・・・？」

私たちがお付き合いしていること。嶺二さんは「誰にもいってないよーん。だってさー僕、アイドルだし。どこから漏れるかわかんないし。漏れたらまた怒られるし」と言っていた。そのわりにはこうして紙面を飾りまくっているのだから、漏れていないことのほうがおかしいかと現状を思い出して私はさっきの問いが意味を成していないことに気づいた。

「知ってる。・・・事務所はどうかわかんないけど。知ってるってこともさっき嶺二にいったんだよね」

「はあ。その・・・ご迷惑をおかけします」

「迷惑をかけられてるのは君のほうだと思うんだけど」

「いえ・・・実際にお仕事で困ってるのは寿先輩だと思うので・・・」

「それ本気で言ってる？」

「本気・・・で、というのは・・・」

「僕が君だったら、彼を疑うよ」

「疑う・・・」

「ねえ、本当に何も無いと思ってる？ これだけすっぱ抜かれるってことはだよ。何かしらしてるとは思わないの？」

ここまで言われてもなお、私は美風先輩の真意がわからなかった。

「してるというのは・・・？」

「浮気ってこと。言わないとわかんない？ 脳天気っていうか、鈍感っていうか・・・」

はあ、と呆れられた声が電話越しでも伝わった。それでも私は本当に、嶺二さんの浮気を疑ったことは一度もなかった。彼の言う「言い訳」が真実のすべてだと思い込んでいたし、彼が本当に嘘をつくような人間ではないことは、今まで過ごしてきた時間と彼の性格と、私を大切にしてくれるそれだけでわかると思っていたから。

「君は純粋なんだね。無垢なんだ。子供のように、それはきっと何者にも染まらない、美しいことなのかもしれないけど、僕には愚かにすら見える」

「・・・」

「あ、ごめん言い過ぎた。今のは忘れて」

褒められているようでけなされているようで、それでいて愚かという言葉で自分を否定されているような。美風先輩はいつも思ったことをそのまま口にするような人だから、それこそ美風先輩こそ純粋で無垢なそのままの人間なのでは？と考え込んでいたら返事が何も浮かばなかった。その合間が美風先輩には居心地悪く感じたのかもしれない。

「で、嶺二から連絡あった？」

「いえ、特に何も」

「え！ 特に何も！？」

「はい・・・」

「呆れた。手出し無用とかいってき。全然守ってあげてないんだ」

またまた何のことかわからず、返事ができずにいると、「わかった。無理はしないで。何か困ってるなら僕が話を聞くから、遠慮なく電話でもメールでもしてよ」といつになく優しい言葉が降ってきた。

「・・・ありがとうございます」

「何？ あ、別に下心とか別にそんなのないからね。僕は・・・なんでもないや。それだけ。じゃ」

最後はしどろもどろに言い訳をすると美風先輩は一方的に電話を切った。

携帯のコール音。よかった、別に着信拒否されてるわけじゃなさそうだ。僕はほっと胸をなでおろしながらも、彼女がそんなことをするような人じゃないじゃないか、と自己嫌悪に陥った。ただ、そういう彼女だからこそ連絡がないのは心配なわけで。連絡はいつもどちらからともなくとっていたから、何も音沙汰がなくなると、連絡をとってはいけないのかななんて躊躇してしまう僕もいて。ああ、恥ずかしい。なんでだ、もう2年も付き合ってた、なんでまた片思いのときのような気持ちになっているんだ。落ち着け俺！

そうしてかけた電話も、むなしく電話中ですというアナウンスに切り替わる。

「電話中。仕事かな。・・・しまったな」

もう1度かけ直そうかとおもい電話を耳から話した瞬間に、「寿さーん！出番です」と声がかかる。

「はいは〜い！ 今行っしま〜す！」

努めて明るい声で返事をして自分を励ましながら、僕は自分のカバンに携帯を入れてセットに戻った。

結局仕事が押しに押しして撮影が終わったのはもう深夜0時すぎ。さすがに彼女も寝ているだろう。起こしたら可哀想だ。メールなら見てくれるかな？ いや待て寝ているところを起こしてしまうだろうか・・・。

帰りの車内、暗がりの中で光る携帯画面で彼女の連絡先をまじまじと見つめながら僕は考える。

そうしてしばらく携帯に集中していると、バンッと助手席側の扉が開く音が聞こえた。

「へ？」

バタムと扉がしまった音と同時に、最近ずっと聞き慣れている声が出た。

「お疲れ様です、寿さん。こないだは送っていただいたのにごめんなさい」

「あ、あ、あー君か。びっくりしちゃったよっ！」

今日の現場でずっと一緒に彼女の彼女。そう、こないだの紙面を一緒に飾ってしまった例の彼女だ。

「ふふ」

「え、えーと」

「こんなに遅くなってしまってタクシーもつかまらなくて。あんなことになってからまたで申し訳ないんですけど、送ってくれますか？」

僕達の目の前を「空車」と書かれたマークをついたタクシーが通り過ぎた。僕はごくりと唾を飲み込んでから一気にまくし立てる。

「あっははは〜 そうだね、こんな夜遅くになったら君も大変だよねっ！！ 僕も送っていきたくとこなんだけどさ〜 こないだのでこっぴどく叱られちゃってね。もう迷惑かけない、って約束したもんだからさ、送るのは・・・」

「約束したっていうのは誰とですか？」

「ん？ 誰って？ えーと、事務所の先輩・・・だけど」

「私、寿さんって付き合ってる人がいるんだと思ってたんですよ」

急に何を言い出すのかこの人は。僕はぎくりとした表情を顔に出さないで精一杯だった。こういうのを女の勘って言うのだろうか。

「僕はアイドルだから。アイドルは恋愛禁止。だから君の座ってる助手席に乗るのもいつも母か姉だけ」

いつもの断り文句をいったところで、助手席に座る彼女が自分の手首を人差し指でちょんちょんと叩いていた。

その仕草は僕の手首のことを言ってることに一呼吸、間を置いてから気づいた。

「ブレスレット。そんな可愛いのも、彼女が贈ってくれるに違いないじゃない」

「・・・そう見える？ これファンの子からの贈り物なんだよね。ついかわいからつけちゃった」

「ファンの？」

「そう、ファンの」

「じゃあファンの子と付き合ってるんですか？」

「だから—— どうしてそうなるの。アイドルは恋愛禁止、とくにファンとの恋愛なんてご法度だよ。君の事務所も厳しいんだったらわかるでしょ？」

僕もそろそろこの押し問答に嫌気が差してきていて、すべての会話を終わりにするために心底うんざりした口調で答えた。それでも彼女はくすくすと笑うだけで、僕の感情は置いてきぼりだった。

「もし他に彼女さんがいて。ファンの子のプレゼントをつけてるなんてわかったら私だったら別れちゃう。寿さんって結構、デリカシーないんですね」

「余計なお世話だよ、まったくもう！ 僕が何身につけようか勝手でしょ」

「そういうこと本当に言わないほうがいいですよ」

「言わないよ。ああ、言わないさ。君以外にはね」

「わかりました。今日は諦めます」

言葉では諦めますといいながら、彼女は絶対にあきらめていないことはその表情を見ればわかる。なんとも余裕あふれる態度で彼女は助手席から降りると、また明日！と満面の笑みを振りまいて出て行った。

「・・・笑うと可愛いんだけどね・・・」

そんな去り際を見て、僕はたまっていた疲れがどっと両肩に落ちてくるのを感じた。

例の彼女と一悶着があってから数日後。それから彼女から接触はあまりなかったけれど、ある日突然それは訪れた。

「いた———っ！！ 暴力反対だよっ！！」

「だったらお前は俺に対する精神的な攻撃をやめろ！ 何が迷惑をかけないだ！」

「なんの話———！？ 全くわかんないんだけど」

「心当たりがないとは言わせねーからな！」

いつになく興奮した龍也に、新聞紙を丸めたようなもので勢い良く叩かれた。小気味よく音が鳴り、事務所にいるスタッフたちの注目を一斉に集めた。

丸められていた新聞紙を龍也が巻物のようにぱっと開いた。

「読めるか、字？」

「バカにしてんの、僕のこと。えーと」

——やはり続いていた！ 今度は仕事帰りの駐車場で密会！ 忍び愛は続く！

「は、これは」

こないだの駐車場で話したときのやつだな。マークされてるのはわかっていたけれど、相手からずかずかくるなんて僕はまったく想像していなかった。だけど目の前にいる龍也は信じていない。

「こないだ本気じゃないか？って聞いたよな。え、どうなんだ？ こんだけ会ってるってことはそういうつもりでもあんのかよ？」

「仮に！ 仮にあったとして。どうするの？」

もちろんここに書かれている彼女のことを聞いているのではない。いづれ将来を決めるなら話さなければならぬ本当の彼女のことを。僕は聞いたつもりだった。

「アイドルは恋愛禁止デース！ そうお伝えしたつもりでしたが？」

シャイニング早乙女。なんの騒ぎだと駆けつけた一人の中にこの事務所の社長である彼がいた。そしてこれが当たり前の答えだと告げる。

「わかってます。それは・・・でも、僕に心に決めた人がいるんだとしたら。社長はどうされるつもりなんですか？」

「ほわっ？」

突然の真剣な僕の表情に、シャイニング早乙女は一步後ずさる。おい、やめとけと龍也が僕を静止する。

「ここでするような話じゃないだろう」耳元で僕にささやく。

社長も、「ミスター寿。ここ数日の君の態度はこの浮ついた気持ちが原因なのデスか？」と尋ねてくる。

「さあ。少なくとも僕の心は、こここのところどこへ向いてるのやらさっぱりです」

ははと乾いた笑いを残して、僕は龍也の肩をポンと叩くと事務所の出口へ向かった。「いや、おいおい待てよ！」と背中に向けられる叫び声を無視して僕は事務所の外へ出るしかなかった。

渡された新聞紙を今度はもう開かなかった。

美風先輩に言われた言葉がジクジクと心を蝕みはじめてきているのを感じていたからだ。

「浮気」なんて考えたこともなかった。先輩はアイドルで・・・忙しくて・・・忙しい合間を縫って、私のために時間を作ってくれて・・・一緒に楽しい時間を過ごして・・・。それを誰でも。誰でもよかったから・・・よかったなら、どうして私を選んだんだろう。

「お前の彼氏はお盛んだな」

いつまでも開かない新聞紙をぐしゃぐしゃに丸めて大男はゴミ箱へと捨てた。

私は携帯から嶺二さんの連絡先を選んで、電話をすることにした。

「あ！！！！ ハルちゃん！！！！ どうしたの、なんで最近連絡くれなかったの？ 心配したんだよ！」

「嶺二さん、、ごめんなさい私・・・ずっと・・・考え事をしていて」

「うん。うんうんうん。いいよ、わかってる。大丈夫だから。今から迎えに行くから」

「え？ 今から、えっと、ちょっと今からは」

「いや、今から行くよ。だってすぐに捕まえないとまたいなくなりそうだから」

そう言うと嶺二さんはすぐに携帯を切ってしまった。もちろん電話して何を言おうか、とりあえず会って話したほうがいいとは思っていたけれどこんなに急に会うことになるとは。

「これからくるのか？」

「今から来るって」

「そうか、じゃあはっきり言うんだな。もうあなたとは付き合えませんってな」

「余計なお世話です。あの、家から出てってくれませんか」

「またお前も急だな」

「そもそも私、あなたをここへ泊める義理もないんですよ」

「・・・冷たいねえ。ま、お邪魔になるだろうから出るとするかね」

大男を玄関へと追い立てて、玄関ドアを開いた瞬間。目の前には、嶺二さんがもうきいていた。

僕が事務所を出て車で行くあてもなくさまよっていたそのとき。近くの公園にある駐車場で車を止めて一息をついていた。僕は携帯を二度見する。表示された名前に、嘘偽りはないかと確認する間もなく僕はすぐに電話に出た。

「あ！！ ハルちゃん！！ どうしたの、なんで最近連絡くれなかったの？ 心配したんだよ！」

「嶺二さん、ごめんなさい私・・・ずっと・・・考え事をしていて」

「うん。うんうんうん。いいよ、わかってる。大丈夫だから。今から迎えに行くから」

「え？ 今から、えっと、ちょっと今からは」

「いや、今から行くよ。だってすぐに捕まえないとまたいなくなりそうだから」

僕はすぐに電話を切った。早く行かなければ。幸いにもここからなら彼女の家はとてつもなく近い、2分いや3分？ 僕はもしかして無意識に彼女の家を目指していたのか？ ストーカー気質なのかな、自分とは苦笑して僕はすぐに駐車場を出発した。

そしてものの3分ほどで彼女のマンションにつく。オートロックではないからすぐに覚えている部屋番号を目指す。エレベーターを待つ時間すら惜しい。階段だ。僕は慌てて駆け上る。彼女の気持ちが、彼女自身が溶けてしまうんじゃないかという恐怖に心を急かされながら。

玄関前についた瞬間に、自動扉なのかと疑うほどのよいタイミングでドアは開いた。

そこにはいつか見覚えのある大男がいた。

「あ、いや、これは失敬。もしかして部屋を間違えたかな？」

間違えたはずなんてないのに、僕はとっさに言う。大男は僕に一瞥すると、後ろに、玄関前にいる彼女に向かって言う。「今日も夕飯はいらない」

「わかりました」と彼女も返事をした。僕は二人のやりとりの意味なんて考える間もなく玄関先にいた彼女の方へ向かった。

「ごめんね。きちゃった」

「嶺二さん」

「・・・僕、邪魔だった？」

「え・・・」

「今の。新しい彼・・・？」

「あっ」

「あ、いいんだ。うん、大丈夫。君の顔を見れて、安心した。安心したな、うん」

とりあえずこの場をごまかそう。なんだ、なんで泣きたくなってるんだ僕は。はは、ははは、辛いとても辛い。情けない。涙・・・涙なんて出そうもないのに鼻は赤くなる。ああ、この場から逃げ出したい。事務所から逃げ出して、彼女から逃げ出して僕は逃げてばかりだ。

「嶺二さん、聞いてください」

僕の表情からすべてを悟ったのか彼女が僕の両手を強く握りしめる。逃げ出そうとする僕を抑えつけるかのように。やめてくれよこれ以上僕を情けない男にしないでくれよ！！

「ごめん、なさい・・・」

心の声はいつしか言葉に。声になっていたようで。

彼女は僕の叫びを聞き入れて、ゆっくりと手を離した。僕は頭の中で自分自身と格闘していたはずなのに、いつの間にか現実に飛び出していたみたいだ。

「嶺二さん、彼は・・・関係ない人です」

「でも夕食を作る仲なんでしょう？」

やめろ。

「嶺二さん、彼は」

「帰るよ。今日は」

僕はそれ以上先を、言い訳を聞きたくなかった。ゆっくりと踵を返す。ここへくるまでの、高揚した気持ちはすっかり僕の中で勢いをなくし、息絶えていた。

「それでどうしようもなくなって、僕に電話をかけてきたわけだ」

ようやく状況整理が終わった美風先輩の声がした。何回電話にかけても嶺二さんは出てくれない。今度は逆だ。こんな気持ちに彼をさせていたなんて。深く反省した。でもそれからどうしたらいいのかわからない。弁明させてほしくても当人と連絡が取れない。一刻もはやくこんな誤解は解きたい。

「ま、今回の件は君にも迂闊なところあったよね。その人、君のお兄さんなんでしょ」

「はい・・・」

散々私に別れろと脅していたあの人物は、私の兄。とはいっても長年海外に音楽留学してある日突然戻ってきたのだ。それから私の話を聞きつけて押しかけてきた。嶺二さんに紹介していなかったのは本当にうっかりしていた。疑われても仕方のない話をしたのも、とんでもない過ちだった。

「まあ反省するのはするとして。嶺二には僕も連絡してみる。ま、彼のことだから。いつものように殻に閉じこもってなんの話を聞いてくれないかもしれないけれど」

「・・・私、嶺二さんが怒鳴るところ初めて・・・見ました・・・」

「僕も見ただことない。よかったね、レアな一面が見れて。やっぱり恋人特権はすごいね」

いつになく他人事の美風先輩の言葉ひとつひとつが棘のようになって心を刺して痛い。

「僕だったら、こんな面倒臭いことにしないのに」

私が言葉に詰まっていると、美風先輩がつぶやいた。それからすぐに「じゃ連絡してみる。切るよ」とあっさり切ってしまった。

それから私も嶺二さんの携帯にかけ続けた。しつこいと思われてもいい、嫌われてもいい、・・・もう、別れることになっても。それはきっと私のせいだから。だけどせめて違うと、私の言葉で説明させてほしい。そして謝らせてほしい。その機会をどうか私にください。そう念じながらかけ続けた。

あれだけ鳴らなかった携帯電話がけたたましくなっている。

だけど僕はその電話を取らない。とったら終わりを認めてしまうことになるんじゃないかと怖いから。もしかしたらあの時、もうすべては終わったのかもしれないけれど、彼女からこれから聞く話はそれを確実にしてしまうことだってあるんだから。

僕は彼女の家からまた公園の駐車場に戻ってきていた。ハンドルに突っ伏しながら、鳴り続ける携帯を無視する。やがてその携帯に紛れながら、窓が叩かれるような「コツコツ」という音が混じり始めたのに気づいた。

見ると今共演している女優だ。ははは、神出鬼没すぎるでしょ。僕はふふ、と笑って助手席を開けた。

「こんばんわ。見覚えのある車があったんで覗いたらやっぱり寿さんいました」

「君はさ、僕のことストーカーでもしてるの？」

「やだな、してないですよ。今回は本当に偶然です！」

「今回ののは？」

「そこは忘れてください」

頼みこむような声で彼女は言う。ま、いいけどねと僕はまたハンドルに突っ伏した。

「携帯鳴ってますよ」

確かにこれだけしつこく鳴り続けてたら、気になるだろう。僕は無言で首を振った瞬間、「もしもし」と彼女が僕の電話に出ているという恐ろしい事態を見た。

「君、だれ」

「あ、失礼しました。私、今寿さんといっしょに共演させていただいている星見と言います」

「ああ、嶺二と一緒によく雑誌載ってる人ね」

「その声、もしかして美風藍さんですか？」

「そうだけど。なんで君が嶺二の携帯に出るの？」

僕は慌てて携帯をひったくる。電話してきた相手がアイアイで本当の本当によかった！！

「あ、あ、あ、アイアイ！！」

「嶺二、うるさい」

「ごめん！ びっくりしたでしょ？ いや～ その～ え～と」

全くもって言い訳が見つからない。どうしてここにこの人がいるのとか、藍のことだからさんざん問い詰めてくるに違いない。

「ふうん。そう。彼女のはただの誤解で、君のは誤解じゃないってことなのかな？」

不思議と藍は納得したような口ぶりだ。「えーと。アイアイ、何を言ってるのかな？」

「嶺二、とりあえず彼女に頼まれたことだけを伝えるよ。彼女の家にはいた人、あれ彼女のお兄さんだから。嶺二の想像していた事とは全く違うから」

「え・・・えーっと、なんでアイアイが僕と彼女のあれこれを・・・？」

「ほんとだよね。困ったら頼ってといたら頼ってくれたんだから僕は感謝するべきなのかな」

「知らないよっ！！ そんなことっ！」

「だから嶺二うるさい」

「ごめん！！！」

「・・・もうっ。耳がおかしくなる。じゃあね、切るよ。後のことは2人で解決して」

藍からの電話を終えて、僕は助手席にいる彼女を睨む。彼女は悪いことをしたなんて思っすらいらないようで、「寿さん、やっぱり彼女いるんじゃないですか」と言う。

「君ねー、これ、プライバシーの侵害だよ。他人様の携帯に出るなんて大それたこと、よくできるね」

「美風先輩の声、とっても素敵でしたね」

「話聞いている？」

「聞いてますよ、プライバシーの侵害でしょ？」

くすくすと彼女は笑う。「あーもう！ なんなのさっ！ もうほら、降りて、降りて！」ぺっぺっと追いやるような仕草で僕は彼女を追い出そうとすると彼女こと星見葵は、「彼女がいること、バラされてもいいんですか？」とあの笑うと可愛い、恐ろしい顔で言うのであった。

しばらくして美風先輩からメールがきた。

「用件は伝えたよ。後は君たち2人の問題」このメールもまた簡潔かつ用件のみだ。だけれども美風先輩のことだから、ちゃんと伝えてくれたんだろう。傷つけてしまったのは事実だから本人に向かって謝りたい。なのに美風先輩を通すことになって嶺二さんはどう思ってるんだろう。美風先輩だって、こんなややこしい色恋沙汰に巻き込まれて迷惑に思ってるに違いない。自己嫌悪に耐えない。

あらぬ誤解の原因となった兄は今日限りで出て行ったもらうことになった。兄は「2人の別れの記念日だ。お祝いしよう」などと非常にふざけたことをいっていたので、玄関にきっちり鍵をかけて無視することにした。

携帯を見つめる。鳴らない電話。少し意地を張っただけで簡単にヒビが入ってしまった。これ以上傷が深くなったら今度こそ本当に割れてしまう。元に戻らなくなってしまう。会いたい、と思った。久々に会った嶺二さんは、どこか痩せたようにも思えた。久々に聞いた声は、空元気を出しているの声だって気づいていた。なのにあんな仕打ちをして。ぎゅっと携帯を握りしめた。閉じた瞼の間から、熱い涙が溢れ出る。こぼれて、頬を伝って、横になっていたベッドシーツに染み込んだ。

それから何時間経ったのか、いつの間にか眠っていた。握りしめていた携帯が光り、「寿嶺二」の名前が携帯の画面に表示される。でもこれは？ メールだ。電話じゃないことに不安を覚える。あまり嶺二はメールを送ってはこない。どうしても電話できない時だけ、メールがくるのを私はなんとなく知っていた。

「・・・本文なし？」

件名も内容も書かれていないメール。本文がない・・・と思っていたら、たくさん改行されているようで、下の方へ行くと、寿嶺二の寝顔写真と、その隣に映る、最近よく見知った顔があった。

恐ろしいことをよくもまあこの笑顔で言えるもんだな。僕はこの子のことを一時でも可愛いなんて思ったことを非常に後悔していた。彼女しか連れてきたことがなかったあの部屋に、僕は星見葵を通すことになったからだ。

「一晩、泊めてください」

何が望みなのと僕は聞いた。恋人が彼女であることを公にするのはどうしても避けたかった。僕のアイドル人生がどうなってもいい。僕がもしアイドルを続けられなくなっても、・・・僕はアイドルでありたかったあのときよりも、彼女のことをやっぱり愛しかったから・・・守りたかったから、僕のことにはもうどうだってよかった。彼女のことをあれこれ詮索されて余計なことまで掘り出されるようになったら？彼女の人生に一生の影を落とすことになるんじゃないか？

僕がアイドルであることが、彼女にとってこんなに重荷になるなんて考えていなかった。

「どうぞ」

僕は終止不機嫌だった。当たり前だ。呼びたくもない人を家に招かなければならない。それもここ何回も誤解が続いている問題の人物を、だ。脇が甘いとか、そういう次元ではないと僕も思っている。

「きれいにされてるんですねー。あ、彼女さんが片付けてくれるんですか？」

「たまにね・・・ま、適当に座って。コーヒーくらいだよ」

僕はキッチンに向かう。ポットにお湯をいれて火にかける。星見葵は座る様子もなく家の中を自由に詮索している。

「彼女さんの写真とか飾ってないんですね」

「あんまりうるちよろしないでくれるかな」

「私落ち着きがないってよくいわれるんですよ」

そういうことじゃなくて、と僕はため息まじりにお湯が湧いたポットをコーヒーに注ぐ。注がれた瞬間にコーヒーの香りが部屋中に満たされる。

二つのコーヒーを片手にリビングへ向かうと、葵の姿はそこにはなかった。

「本当に君は、人の神経を逆撫でするのが得意なんだね。いくら可愛くてもそれじゃモテないよ？」

彼女の姿は隣にある趣味の部屋にあった。今まで出したCDやドラマのDVD、脚本なんかをおいてある部屋だ。

「別にモテなくていいです。ふーん、これ歌謡祭で優勝したときのトロフィー。あ、CD。いい曲でしたよね」

「それは」

僕が静止する前に彼女はもうそのCDを開いていた。

「あはは、見つけちゃった」

彼女は指先でひらひらとその写真をつまんだ。僕と春歌の写真だ。

「返せ」

「こわーい。ふーん、この子、どこかで見たことあるな」

「返せっていったよね。大人しくそのCDにその写真をしまってくれる？」

「あ！ 思い出した。なんだ、彼女って意外と近くにいたんだ。この子、寿さんの曲を作ってる」

僕は無言でCDをひったくった。その時、バランスを崩した葵が、わざとなのか、写真を勢いよくちぎった。

歌謡祭で2人で撮ってもらった写真。今の時代だから、元のデータはパソコンや携帯に入っているかもしれない。でも現像したのはこの1枚だけ。写真もあまり、撮らない。撮れない。何かがあったら困るから。それは僕がアイドルだから。僕がアイドルだからという理由だけで、僕たちが手元に残せる写真は本当に少ない。

「・・・ごめんなさい」

「写真、そこに置いといてよ。コーヒー、入ってるから」

コーヒーを持ってこの部屋にこなくてよかったと思う。熱々のコーヒーを彼女にぶちまけていたかもしれない。大人げない。しかも女の子に。

「コーヒー飲んだら帰って。僕もいい加減、君のこと許せなくなってきたから」

「・・・写真、ごめんなさい」

「もういい。謝っても破られたってことは変わらないでしょ」

「そうですけど・・・」

「コーヒー飲み終わった？ もうないね。じゃあ玄関はあそこだから」

コーヒーカップの中身は真っ黒に満たされていた。それでも僕は葵の腕を無理矢理つかんで玄関までひきずった。

「さよなら。もう二度とこないでね」

「寿さん」

「何も聞きたくないし聞こえないよ」

「私たち、なんで2回も写真に撮られたか不思議じゃないですか？」

「別に、そういうこともあるんじゃないの。気にならないし、気にしたくもない」

「私、本格的に嫌われちゃったみたいですね」

「嫌われにきてるんだから仕方ないよね」

「だってしょうがないじゃないですか。恋愛って出会った順番で決まるんですか？ 私が、その子より先に寿さんと出会って共演してたら・・・！ 未来は変わってたかもしれないじゃないですか！」

「未来は同じかもしれないよ。僕と君との間には何も起きずに僕は春歌と付き合う」

「そんなことない！ 寿さんに彼女がいなかったら・・・！私にだってチャンスがあった！好きだっていえた、こんなひどいことしなくてもきっと優しくしてもらえた！彼女がいるから・・・相手にしてもらえないだけ・・・！」

「こんな事をしないと振り向いてもらえないなんて思う時点で、僕はきっと君に興味を持たないよ」

「っ・・・！！」

「帰って。それだけ」

「私がこのまま戻ったら、また紙面に出来ます。彼女が寿さんのパートナーってこともわかりました。全部言います、バラします！」

「いいさ！ 好きにしたらいい！ 何回も何回も脅せるなんて思ったら大間違いだ！ 君が思ってるよりも僕は春歌のことを愛してる！！ だから僕のアイドル人生なんてもうどうでもいいんだ！ そして君が彼女を傷つけるなら僕は絶対に君を許さないよ。僕は全力で彼女を守る。だって僕は彼女の彼氏だから」

葵はその言葉を聞いてもそこから動かない。涙を必死でこらえていても、大粒の涙があふれているのはもうわかる。しゃっくりをあげながら、必死に耐えようと、涙を隠そうと左手を右手を、顔に集めて隠すがもはやそれは意味を成していない。次第に葵の呼吸がおかしくなる。ヒッヒッと声をあげたかとおもうと苦しそうに膝から崩れ落ちた。

「ちょっと何の冗談かな？」

「ヒッ・・・ヒッ・・・」

「ちよっともう。大丈夫？ どうしたの？」

「息が・・・ 息ができない・・・」

「・・・仕方ないなあ」

泣きじゃくる彼女の背中をさすりながら、僕は部屋に戻る。この症状を僕は見た事があるので対処はできる。過呼吸に違いない。袋に空気をいれて膨らましてから、「これの袋から空気をすって、ゆっくり吐いて」といって手渡す。

ヒッと繰り返しながら葵は袋を受け取り、言われた通りに呼吸を繰り返した。そこからゆっくりソファに横になるように伝え、背中をゆっくりと撫でてあげた。

「・・・こういうこと、よくあるの？・・・」

僕が聞くと、葵は小さく頷いた。

「過呼吸は心の病気が原因だったりすることもある。ちゃんと相談できる相手はいるの？」

今度は葵は小さく首を横に振った。

「君にはいろいろ欠けてるものがある。人の気持ちを考えること、恋や愛は理屈じゃないってこと。ま、わかるわけないか。君は若いからこれからもっといろんなことを体験して吸収できる。女優としても。僕は君の期待には応えれない。それが恋をした人に出される、答えの1つだよ。経験するのは悪いことじゃない」

ぼんぼんと頭を撫でる。彼女は今度は頷かなかった。

「どうも、強情だね。じゃ、僕から失恋した君へのせめてもの手向け。このままお眠り。すべてを忘れて、ね」

こんなにまでなった女の子を叩き出すような激しさは僕はどうしても持ち合わせていなかった。彼女にされた仕打ちはどれも許せるものではないけれど、それでも。

僕は彼女の頭を撫ぜながら、今日一日の疲れからいつの間にか眠りに落ちていた。

この写真に込められた意味はなんだろう。もう相手はいるから気にするなってことかな。だめだ、悪いことばかり考えてしまう。無防備な嶺二さんの寝顔、もう随分見ていない。隣にいる女性の表情はわからないけれど。でも嶺二さんの携帯でこれが送られてきたってことは、嶺二さん自身が送ったってことなのかな？

そうだとしたらやっぱりそういう意味なのかな。

考えても考えても答えはでてこない。携帯を眺めていると、急に画面がまた「寿嶺二」の名前に切り替わった。私は嫌な考えを振り払って、すぐに電話に出る。

「全部聞いたよ。アイアイから」

「すみません、・・・私、嶺二さんにも美風先輩にもご迷惑をお掛けしっぱなしです・・・」

「僕の方こそ、話も聞かずに飛び出してごめん」

「はい・・・」

「ハルちゃん」

「はい・・・」

「君に話があるんだ」

「私も・・・お話したいことがあります」

「じゃあ。今から行くから」

そうして電話は切れた。また携帯の画面にさっきまで見ていた写真が映る。話、ってなんだろう。別れ話、かな。私の話は単純だ。まずは直接謝って。それから。私嶺二さんのことが好きって伝えられたらそれでいいのかな。私の恋がそこで終わるのだとしても。これ以上の誤解もなく素直な気持ちを伝えることができたなら私はそれでもう。

玄関の呼び鈴が鳴る。いつだって嶺二さんは早い。行くよ、といわれたらすぐ来る。

玄関にむかって慌てて駆け寄って扉を開けると、そこに彼はいた。

「・・・はは、このところいろいろありすぎてまずは何から話したらいいのかわかんないね」

「そうですね・・・」

リビングに彼を通し、お互い横並びにソファへと腰掛けた。お互いの体に空いた隙間が、まさしく私たちの間にある距離感そのままを映し出しているようで、二年前に始まった二人の関係が変わっていているのがわかった。

「お茶いれますね」

いたたまくれなくなって立ち上がったところで、手首を彼に掴まれる。

そして・・・そのまま引き寄せられて、キスをされた。「んっ・・・れ、嶺二・・・さん」

「君とまたこうしたかった」

「・・・私もです・・・ですけど・・・」

「どうしたの？ マイ・ガール。強引すぎたかな？」

「違うんです。私、知ってるんです・・・私、わかってるんです・・・」

「何を知ってるって？」

私は何を言っているのかわからず、携帯を取り出して、見せた。もう何もかも知ってるから、今日の話は本当は聞きたくないんだと言いたくて。

「・・・何？ この写真。僕・・・？」

「昨日、嶺二さんから送られてきた写真です。私以外にもこういうことしてる女性の方、いるんですね。・・・私、嶺二さんのこと信じてた、信じていたつもりでした。でもやっぱり、こんなふうに、こんな写真が送られてきたら私、やっぱり辛いんです。悲しいです」

「ちょ、ちょっとまって。また何か僕たちがわからないことが起こってるんじゃないかな？ 説明させてくれる？」

「私、嶺二さんが好きです・・・この気持ちから卒業しろと嶺二さんが仰ってもできる自信がないです」

「ちょ、ちょーっと待ってタンタンマっ！！ この写真のことは僕は知らないよ！！ ああ、、えーと、心当たりはあるんだけど・・・うん、それについては僕も軽率だった、・・・本当にごめん」

嶺二さんの表情がくるくるとめまぐるしく変わる。最初は慌てたような顔、次に察した表情、それからうなだれて落ち込むように頭を下げた。それを見届けた後で私は話を続ける。

「わ、私っ、嶺二さんが色々な女性の方と写真を撮られるの本当は嫌でした。本当にそんなことがないっていうのがわかっていても。もしかしたらって思ってしまうように最近になってしまっって・・・」

「わかった。話を整理しよう。僕は君以外とは付き合っていないし、付き合う気もない。僕にとって春歌1人だけなんだよ。僕が写真を撮られても嫌がらなかったのは君のことを隠せるとかそういうあざといことを考えていたからなんだ。決して本当にそういうことしている訳じゃないってことはわかってくれる？」

「では、この方とはお付き合いはされていないんですか・・・」

「してない！ 何もしてないしっ、そんなことなっただことなんてないしっ！ れいちゃんのことを信じて！」

「そうだったんですね・・・」

「うん、そう。こんなに心配させて本当にごめんね」

今度は額にキスされる。それから唇、頬、首筋に。「僕もハルちゃんが違う人のことを好きになって、僕のことを捨てるんじゃないかって気が気じゃなかったよ」

「説明するべきでした・・・私の兄のこと」

「お兄さんがいるなんて聞いたことなかったし。ハルちゃんの家族のこと僕何も知らないんだな、って痛感したよ。これから将来のことを考えるならもっとお互いの家族のことも知らないかね」

「将来、ですか？」

「・・・そう、君に話があるっていうのはそのこと」

ふふ、と妖しく嶺二さんは笑った。それから「目をつむって」と言う。目をつむってといわれるときはだいたいキスをしてくれるときだから、私はドキドキしながら目をつむる。

何秒たってもキスは降ってこない。じりじりながら待っていると、「目あけて」と言われてしまった。

「春歌、結婚しよう」

私の目の前には、白い箱。ピンクのリボンでラッピングされている。「開けてみて」と少し緊張の入った声で嶺二さんが言う。リボンをすりと引っ張り白い箱を開けた。

「嶺二さん、これ・・・」

「うん。ごめんねいつも突然でさ」

「こんなの・・・ずるいです・・・！」

「答えを聞かせてはくれないのかな・・・？」

「はい・・・」

返事をした瞬間にいきなり抱きしめられる。「っは———！！ 緊張した——！！ 今までの人生で、最、高、に緊張した！」

あっはは、といつものように笑いながら言う。

「よかった。逆に今しかないって思ったんだ。恋人同士だって喧嘩はするでしょ？ 僕たちはちょっと複雑でわかりにくい関係だから、こういうことってこれからもたくさんあると思う」

「そうですね、先輩は・・・アイドルだから」

「アイドルだけど、僕は君の前では1人の男の子だから。君と結婚したい。君を大事にしたい。結婚するにたる理由なんてお互いを愛してる、これだけで十分でしょ？ それでも結婚できないっていうなら、そうだな・・・子供でも作る？」

「え！」

「だってえー、世間が僕たちの結婚を許してくれないなら、許さざるを得ない状況を作るしかないじゃない？」

そういってもう、嶺二さんは私を抱き寄せた。雰囲気はすでにそうしよう、うんそうしよう、という嶺二さんのペースに巻き込まれている。

「子供を理由にするのは私は嫌です・・・ やっぱりみんなに認めてもらって祝福してもらって、そうしてから私は嶺二さんとの子供がほしいです」

「ハルちゃんはいつだって真面目だね。・・・そういうところが僕は大好きだよ」

「私、真面目ですか？」

「そんなこと考えることをしない人もいるかもしれないしさ。僕みたいだね。後先考えず、というか。そうやって僕らの未来をちゃんと考えてくれてるの、とっても嬉しいなって思うよ」

「私も嶺二さんから・・・その・・・子供が欲しいっていつてもらえてとても嬉しいです」

「あはは。じゃあ、今からする？」

「・・・へ」

嶺二さんが私を一気にソファへ押し倒す。「ずっと我慢してたんだよね。会うこともできなかったしさ。・・・いいよね」

「あ・・・あ・・・っ・・・あの、ここで、でしょうか？」

「僕はいますぐしたいんだよ、マイガール」

抵抗する時間すらなく、あえなく私はソファへと押し付けられてしまう。そのままキスが続き、胸のあたりに嶺二さんの吐息がかかる。

「んー 久しぶりに感じるハルちゃんの香り、たままないねっ！！」

首筋のあたりを、鼻先が掠めていく。吹きかかる吐息と、すんすんと鳴らす鼻息がたまらなくすぐったくて、つい「やめてください・・・！」と笑いをこらえるように言う。

すると、もともといたずらっ子のような嶺二さんは調子に乗って、「ここがいいのかな～？」なんて言いながらどんどん行為は過激さを増していく。

「ん・・・」

やがてそんな声も止み。嶺二さんは耳元で短く囁く。「愛してる」

私は恥ずかしくて小さく頷くことしかできない。

「聞かせてよ。君の声で。僕のこと好きだって、お願いだからって」

「・・・す、好きです・・・」

「何回聞いても飽きないなんて不思議だよね～ これこそ恋の魔法にかけられたってやつなのかな？」

満足そうに笑うと嶺二さんは「れいちゃん、いっきま～～～す！！」といつものように冗談まじりで胸に飛び込んできたのだった。

細くて長い指が、私の髪を撫ぜる。時折毛先を絡ませながら、おもちゃのようにいじっている。

「ハルちゃんの髪はサラサラだねえ・・・ どんないトリートメント使ってるの？」

「ふ、普通にお店で売ってるやつです」

「ふふん。本当はトリートメントなんか興味ない。興味あるのは髪の毛よりもハルちゃんだから」

ベッドの中でまた急に抱きつかれて私は動揺する。温かい裸の感触が、恥ずかしく感じてしまう。

「ん、もう～！ ハルちゃんは本当に照れ屋さんだよ。恋人同士、ここまでいったらもう照れることなんてないとおもうんだけどなあ」

少し不満そうな顔で嶺二さんがこちらを見る。そんなことを言われても、それでも！ 慣れないし、慣れてしまったら怖いと思うのは私だけなのかな。

「いつまでもトゥーピュア・ピュアガールっていうのも、たまらないけどね」

ふふ、とまたいたずらっ子のようににはにかまれてしまうとそこからはもう何も言えない。

「というかさ、そんな表情を毎回されると僕の我慢が大変だからちょっと控えてほしいところもある・・・」

珍しく視線を合さずに言う言葉の意図がわからないといったようにはてなを頭に浮かべたような表情をしていると、またまた嶺二さんが身を乗り出して抱きしめてくる。

「だからー！！ こういうこと！・・・ね、わかる？ もう大人なんだからわかって！」

ぎゅーっと熱くなるものを押し付けられて、私はコクコクと繰り返し頷くことしかできなかった。「じゃあわかったなら続きしよ？ ぼくちん、もう我慢できなあああい」

「へっ・・・ 朝からでしょうか？」

「朝も夜もれいちゃんには関係ないの。いつも元気もりもりマッチョッチョだし！ あ、でもハルちゃん疲れてるなら僕もオヤスミするけど？」

「オヤスミ・・・されなくて結構です」

「ハルちゃんも言うようになってちゃって！ じゃあ、今夜は、今夜じゃないな、今朝は・・・もうどうでもいいや！ 寝かせないぞー！！」

それから私たちは何度も何度も愛し合っ。時折嶺二さんの携帯が鳴っても嶺二さんは無視し続ける。私の携帯も交互に鳴るようになって、段々2人でいることがバレてるのかな・・・？なんてどきまぎしはじめると、それがすぐにバレて「ハルちゃん・・・っ・・・僕だけに集中して・・・！」と怒られてしまい。

結局はその日はずっと2人でベッドから離れない嶺二さんの言う、文字とおりの「アチチな夜」になってしまったのだった。

「はあっ最高だったよ。これで気分よくお仕事に戻れる気がする～」

ようやくベッドから這い出して、遅めの昼食を作ると嶺二さんはどれもこれもおいしそうだと食事を始める。そんな中でも携帯は鳴り響いている。

「嶺二さん、携帯、ずっと鳴ってますけど・・・」

「ん、いいのいいの。今ご飯食べてるし一行儀悪いし。僕、人とおしゃべりしているときは携帯いじらない主義なんだ」

「ですけど、おとといあたりからずっと鳴ってるような・・・」

「まあ十中八九仕事のお話だろうね。だって何も言わずに飛び出してきちゃったからさ」

わかってるから大丈夫ぶいっと謎のVサインを作る嶺二さん。それはつまりこっぴどく叱られるということなのでは・・・？

「色々な人に迷惑かけてるのはわかってるよ。もちろん君にだって今回迷惑をかけたって思ってるし。だけど僕が選んだ道だから後悔してない。何があったってどうであったって僕は君へ続く道を選ぶよ！」

私があまりにも心配そうな表情でのぞきこんでいたからなのか、今度は真面目な表情できちんと説明してくれる。だけどすぐその後で「唐揚げもってお詫びにいったほうが、誠意伝わるかな？」と続けたのでやっぱりちゃんと皆さんに説明して謝罪できるのか不安になるのだった。

携帯の着信履歴をしてみる。

事務所からの恐ろしい数の電話、これはきっと龍也先輩。アイアイからが連続3件（新記録更新）、ランランから着信1秒のワン切りが1件（電話してきた意味あるのかな）、ミューちゃんからは相変わらず電話なし！（記録更新）。

「はあ！ 嫌だ！ 謝りにいくのやーだな。帰ろうかな」

僕は車の中でまたハンドルに突っ伏す。今度は助手席にいるハルちゃんが、そんなことだめですよ、今からちゃんとお詫びしにいくんです、と僕を監視している。

「わかってるよ、僕もいっぱしのアイドルだから。謝罪になら慣れてるよん」

「それは頼もしいです！ がんばってください！」

謝罪に慣れてるってところを豪快にスルーしてくるハルちゃんはやっぱり大物だなあ。とほほ。こうして僕はまず事務所へ向かった。

「ご心配おかけして申し訳ございませんでした」

目の前には静かに腕を組む龍也先輩。この御方にはもう何千回と叱られているのにも関わらず、叱られる恐怖が抜けない。怒りのレポートリーがきっと豊富なんだな。

そんなくだらないことを考えながら頭を下げているのもお見通しのようで。

「この馬鹿。誠意がこもってねーんだよ、おまえの謝罪は。大体、お前俺より先にこいつにちゃんと謝ったのか？ どーせ、ごめんごめえんとかくだらねー謝り方してごまかしたんじゃねーのか？」

「さすがに僕も謝るときはふざけないよ・・・」

「ま、それは俺もわかってる。こいつはお前のパートナーなんだからな、お前の行動一つ一つがこいつの評価にも関わってくる。逆も然りだ。それを承知の上で組んでるんだろお前ら？」

「はい」

私もすかさず返事をする。「今回のことは、私も寿先輩にいらぬ誤解をさせてしまったことが原因ですから、寿先輩だけを叱らないであげてください」

「ん？ 誤解？」

「後輩ちゃん、そういうのは言わなくていいんだよ！！ 悪いのはこの僕なんだから！！」

「は？ お前らまた俺に隠れてとんでもねーことやらかしてんじゃねーだろな？」

龍也先輩がギラギラした目で僕達ふたりを交互に見て疑っている・・・。

「じゃ、じゃあ僕たちこれから迷惑かけたメンバーのみんなにも謝ってくるから！」

第二の怒りの雷が落ちてくる前に僕たちはそそくさと事務所をあとにするのであった。

ちょうど会議室で3人が集まってるると小耳に挟んだので、僕たちはそこへお邪魔することにする。僕たちが会議室に入ると、第一声がランランの「コルぁ！！！」でお出迎えでした。

「てめーら、心配かけやがって！！ しかも嶺二、てめー仕事サボりすぎなんだよ馬鹿野郎！ お前の代打どんだけ打ってやったとおもってたこの野郎！」

「ランラン、その節はほんとーにご迷惑おかけしましたー！！ 超助かりましたー！ でも心配してたわりにはワン切りだったけど・・・」

「蘭丸、電話かけようか悩み悩んでワン切りになったんだよ」

ふう、と小さなため息をつきながらアイアイがようやくしゃべりだす。

「ま、迷惑はかけられたけど。こーしてまた無事に戻ってきたんだしいんじゃない」

「アイアイー！！ どおしたのー！！ 珍しく優しいじゃない！！」

「前言撤回、バカ嶺二にはバカ嶺二なりの罰を受けてもらおうかな？ 珍しく優しいなんて失礼だよ」

「だって事実だから・・・」

「ふん、貴様のそういう態度が周りを怒らせるのだぞ。まったく愚かなやつだ」

「ミューちゃんにいたっては連絡すらなかったですけど・・・」

「お前の電話番号は消したからな。連絡などせん」

「え、なんで？ なんで消したのー！？ ねーなんで！？」

「うるさい、バカ嶺二」

「ああ、マジでうるせーな！ 罰ゲームに飯でもおごれや！」

「では俺もご相伴に預かるとするか」

なんだかんだで皆さん、嶺二さんの復帰を楽しみにされていたようです。怒っているとはいっていただけ、その怒り方も親しい仲間への態度そのもの。結局嶺二さんはまたみんなの分の食事を奢るという約束をさせられてしまい、龍也さんにはいままでの仕事の穴埋め分として信じられない量のスケジュールをいれられてしまいました。

「ごめんね・・・ また、会う時間とれなくなりそう・・・」

「いいんです。お仕事でも、会えるじゃないですか」

「なんかハルちゃん嬉しそうだね？ 前とは全然違う人みたい」

「嶺二さんも。 なんだか誤解はたくさんあったけど、前より距離が近くなった気がして」

「うん。やっぱり、ケンカや相手の気持ちを知る努力はしなきゃね！ 何もないまま過ごすなんて人間らしくないよね」

私たちはそうって笑う。嶺二さんは続けた。

「うちの実家にハルちゃんをもう一度ちゃんと連れて行きたい。僕たち結婚しますって、紹介したい」

「・・・はい！ ありがとうございます。そしたら私、寿弁当の作り方、教えてもらいますね」

「え、いや、いいのいいの！ ハルちゃんにはハルちゃんの夢があるんだからあ。そんなこと言うとうちの母ちゃんと姉ちゃんが小躍りして喜んじゃう・・・から」

今度は私から、キスをする。「唐揚げの味、ちゃんと覚えて私たちの子供にも食べさせてあげたいです」

「あはは・・・うちの修行はハードだよ！ ハルちゃんについてこれるかな～？」

「大丈夫です、私には嶺二さんがいますから」

「こりゃ、まいったな」

2人で乗る車はどこへいくのか。その都度ハンドルを握る嶺二さんの気の向くままに流れていくかもしれないけれど、私たちはいつまでも一緒だから怖くない。